

2025年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

近年、世界中で動物の言葉をヒト語に翻訳する作業が始まっている。対象動物はイヌやネコを筆頭に、ニワトリ、ミツバチ、イルカ、ゾウ、シジュウカラ、オオカミ、プレーリードッグなど多岐にわたる。動物語翻訳が可能なのは、言葉と行動が強く連動しているからだ。行動観察から鳴き声が何を意味するか推定できる。その作業を積み重ねて訳語の精度を高めていくと、動物語―ヒト語辞書の編纂が可能になる。

タカラトミーは「パウリンガル」というイヌ語の翻訳機を発表し、二〇〇二年の（注一）イグノーベル賞を受けた。イヌの首輪に装着した小型マイクから鳴き声を送信し、受信機側で（注二）声紋分析することで、感情を六種類に判別するしくみだ。（注三）フラストレーション」「威嚇」「自己表現」「楽しい」「悲しい」「欲求」の六種類だが、それぞれの感情に該当する三〇ほどの音声を（注四）ランダムに出力するので、二〇〇もの単語を使っているかのように聞こえる。

だが①鳴き声の翻訳ができれば動物の世界を理解できると思うのは早計だ。動物たちは、鳴き声だけで感情を表現しているわけではない。むしろ鳴き声は脇役で、仕草や表情、匂い、色彩などのほうが重要な役割を担っている場合が多い。イヌやネコなどと生活を共にしているヒトは、彼らの心を知るには耳や目、尻尾、毛の動きなどに注目することが必要だとわかっている。

ここでは、鳴き声だけでなく、多様なシグナルで発信される情報を言葉と呼ぶことにする。動物たちは様々な言葉を使って何を伝え、どのようなコミュニケーションを創っているのだろうか。そして、動物たちとの対話を通じた共生の道はないのだろうか。

最もわかりやすい動物の言葉は他個体に危険を知らせる鳴き声（警戒声）だ。ヒトも危険に遭遇した時に叫び声をあげる。炎が上がると「火事だ」と叫び、車がヒトに近づくと、「待て、危ない」と大声を出す。警戒声がわかりやすい理由は、動物もヒトも同じようなシグナルを同じような目的で使っているからだ。

動物は危険に遭遇して、反射的に恐怖の声を出すのだろうと、二〇世紀中頃まで思われていた。近くにいた仲間は、その声を聞いて危険を察知するかもしれないが、恐怖の声は仲間へのメッセージではないという解釈だ。だが、ベルベットモンキーやニワトリなどの研究から重要な示唆が得られている。

アフリカのサバンナ地帯にいるベルベットモンキーは、ワシ、ヒョウ、ヘビに対して別々の警戒声を発する。警戒声を録音して実験的に流してやると反応して逃げるが、同じ声を数回流すと反応をやめる。流された音声信頼できないことがわかったからだ。彼らは警戒声に単純に反応するのではなく、警戒声の真偽を評価していることを意味している。

群れの中にいるニワトリは、近づいてくるタカに気づくと鳴いて知らせるが、仲間が近くにいない時は鳴かずに不動の姿勢をとる。警戒声は群れの中で情報交換するための言葉なのだ。

②警戒声の研究で有名になった動物がプレーリードッグだ。プレーリードッグは北米の草原地帯に棲息するリスの仲間、穴を掘って巣穴を作り、群れで生活する。行動圏はそれほど広くなく、いつも同じ地域で生活している。そのため彼らは多くの捕食者に狙われる。捕食者の立場からすると、プレーリードッグの居場所さえ知れば狩りがやりやすくなる。巣穴から出てくるのを辛抱強く待てばいいからだ。プレーリードッグのほうは、対抗手段として高度な警戒声を発達させ防衛力を高めている。

プレーリードッグは侵入者によって音声を使い分けている。侵入者が空から来る場合と、地面から近づく場合で、警戒声を変えるのだ。タカから逃げるのと、ヘビから逃げるのでは、逃げ方を変える必要がある、この情報は有益だ。

それだけではない。侵入者の詳細を表現することもできる。侵入者がヒトなら、ヒトであること、どのぐらいの身長か、何色の服を着ているか、棒などの凶器を所持していないか、といった情報を語る。イヌなら、大きさと色、形、どんなスピードで近づいてきているかも表現する。未知の侵入者については、いくつかの単語を組み合わせた「卵形の未知の危険物」のような表現を使うこともある。上空から来る敵と地面から来る敵を区別して別の警戒声を使う動物は、もちろん日本にもいる。シジュウカラやコガラ、ニワトリ、リスなどだが、研究が進めば鳥類や哺乳類以外にもまだまだ見つかることだろう。

カラハリ砂漠に住むクロオウチュウは、カラスを小さくしたような黒い鳥だ。カラハリ砂漠には、チメドリ、ムクドリ、ミーアカヤツなども同居していて、奇妙な相互依存の関係が生まれている。

クロオウチュウは飛翔昆虫をねらって高い木の梢に止まることが多いので、ワシやタカの飛来に気づきやすい。空から敵が近づくと、けたたましい警戒声をあげる。集団で反撃することさえある。まさに砂漠の③だ。ミーアカヤツや他の鳥たちはクロオウチュウが上げる警戒声に聞き耳を立てている。捕食者に対する警戒をクロオウチュウに任せて、ゆっくり採餌できるからだ。

しかし、クロオウチュウが③として信頼できるのは、餌となる昆虫が豊富な雨季だけのことだ。乾季になると、昆虫は飛ばなくなる。乾季に入って得られる餌は、地面に隠れているバッタやトカゲ、サソリなどだ。クロオウチュウは飛ぶ昆虫を捕まえるのは得意だが、地上の餌を見つけないことが不得手なのだ。そこで、他の住人たちの行動を監視し、見つけた餌を横取りしようとする。その時使うのが嘘の警戒声だ。

警戒声を聞いた鳥は、餌を落としてその場から逃げてしまう。その間にクロオウチュウは急降下して、被害者の餌を奪い去る。クロオウチュウが一日に摂取する餌の実に二〇%は、盗むことで得ている。

クロオウチュウは自分自身の警戒声を使って④被害者をだますのだが、繰り返し同じ鳴き声を出していると、嘘がばれて相手は反応しなくなってしまう。⑤「オオカミ少年」となったクロオウチュウは、さらなる高等戦術を使う。鳥やミーアキャットの警戒声をまねるのだ。クロオウチュウは五〇を超える別の種の警戒声を覚えて、まねることができる。たとえば、自分自身の警戒声を二回つづけても効果がない場合は、三回目は標的動物の警戒声を発するという具合。そして、この作戦はかなり成功する。

⑥カラハリ砂漠の住人たちは、言葉を介した共存共栄の関係にあると言える。季節によって依存する立場が交代することで、相互依存の関係が維持できているようだ。

(椿 宜高『椿 宜高『自然に学ぶ「甘くない」共生論』)

(注1) イグノーベル賞

(注2) 声紋分析

(注3) フラストレーション

(注4) ランダムに

人々を笑わせ考えさせた研究や商品の発明などに与えられる賞。
個性や特性を判断するために、声の特徴を機械で調べること。

欲求不満のこと。

手当たり次第に。無作為に。

問一 傍線部①「鳴き声の翻訳ができれば動物の世界を理解できると思うのは早計だ。」とありますが、それはなぜですか。四十五字以内で答えなさい。

問二 傍線部②「警戒声の研究で有名になった動物がプレーリードッグだ。」とありますが、プレーリードッグの警戒声を研究した結果、どのようなことが分かったのですか。

問三 ニつの空欄③にはどちらも同じ語句が入ります。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 門外漢 イ 詐欺師 ウ 風来坊 エ 技術者 オ 異端児 カ 用心棒

問四 傍線部④「被害者」とありますが、これにあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ワシ イ チメドリ ウ 飛翔昆虫 エ トカゲ オ ニワトリ カ プレーリードッグ

問五 傍線部⑤『『オオカミ少年』となったクロオウチュウは、さらなる高等戦術を使う。』とありますが、それはどういうことですか。

問六 傍線部⑥「カラハリ砂漠の住人たちは、言葉を介した共存共栄の関係にある」とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クロオウチュウの警戒声は、他の動物もそれを利用して捕食者から身を守ることができ、他の動物はその見返りとしてクロオウチュウに食料を提供することで、お互いに食料と身の安全を確保し合える関係にあるということ。

イ クロオウチュウの警戒声は、鳴き方を変えることで他の生物にとって生存に有利になったり不利になったりするため、それをうまく用いることで自分の餌である飛翔昆虫の数が常に一定になるようバランスを保っているということ。

ウ クロオウチュウの警戒声は、ミーアキャットや他の鳥の警戒声も発することで他の動物それぞれに捕食者がいることを伝えることができないため、言葉を利用してより多くの動物が生存できるようなシステムになっているということ。

エ クロオウチュウの警戒声は、雨季にはミーアキャットや他の鳥の捕食者への警戒を肩代わりする一方、乾季にはそれを利用して自身が餌を確保する手段にも使われており、お互いに餌を得て生存するために役立っているということ。

オ クロオウチュウの警戒声は、他の動物に対して捕食者がいる危険を知らせることができ、さらにそれを利用して自分の餌を手に入れることもできることから、他の動物と情報を交換する言葉だと言えるということ。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

私は、お人形遊びをするように、（注）バーバの白い髪の毛をもてあそぶ。バーバの髪の毛をいじることを、ママはあまり良しとしない。でも私は、そうされている時のバーバはとても気持ちよさそうだと感じている。今日は、髪の毛を左右二つに分けて、三つ編みに結んでみる。本当に、柔らかくてお人形みたいだ。私が持っているカラーゴムで、左右の端を結んであげた。そして、私は耳元で囁く。

「バーバ、おなかすかない？ 私のキャラメル、食べる？」

ママの言い方が移って、幼い子供に話しかけるような口調になった。私は、箱からキャラメルを一つ取り出し、紙を剥いてバーバの口元に行こうとする。と、その時、バーバの口元がふわりと緩んで、かすかに「ふ」という音がした。

「ふ？ ふって何？ このキャラメルは、熱くないから、ふーふーはしなくていいんだよ」

バーバが何かに反応したことに慌ててしまい、早口になった。けれど、A 私がキャラメルをバーバの口に入れようとする、バーバはまたきゅつとくちびるを閉ざしてしまう。

「はい、あーん」

ママと同じ、甘ったるい声になった。すると今度は、バーバの右手がすーっと伸びて、窓の向こうを指差す。普段は直射日光が眩しいので、薄い方のカーテンは閉めたままだ。

「お外、見たいの？」

しっかりとバーバの目を見て尋ねると、バーバはまた、「ふ」という音を漏らした。

じゃあ、ちょっとだけだよ、そう言っ、私はバーバの寝ているベッドを離れ、窓辺に移動する。それから、カーテンを開けた。その時、

「バーバ、もしかして、ふって富士山の、ふ？」

ふとひらめいたのだ。その瞬間、バーバの薄曇りのような色の奥まった瞳が、ピカッと輝いたように見えた。

あまりにも当たり前に存在するので見慣れてしまい、忘れそうになっているけど、私達が暮らしている町からは、富士山がよく見える。昨日まで大雨が降っていたから、空気がいつもより澄んでいるのかもしれない。富士山は、ホームの窓から見える景色の中で、しっかりとした輪郭を現わしている。

「これでいい？　バーバ、富士山が見たかったんだね」

カーテンを開けたせいで、ますます心地よい風が流れ込んでくる。ママは、すっかり眠っているらしい。けれど、まだバーバは、「ふ、ふ」とかすかな息を出す。マユならわかってくれるでしょ、と訴えかけるような表情で。

「見えない？　ほら、よく目をこらすと、向こうに、富士山、見えるでしょ」

バーバは口元をほころばせ、くちびるをパクパクと動かしている。

「ん？　おなか空いた？　やっぱりキャラメル食べてみる？」

そう言いかけた時、何かを思い出しそうになった。バーバのこの表情を、いつかどこかで見たことがある気がしたのだ。いつだったけ？　バーバの、はにかむような柔らかな表情。

あつ、そうだ。何年か前に家族みんなで、かき氷を食べに行った時だ。並んで並んで、やっと噂のかき氷にありつけた時、バーバは、言ったのだ。ほーら、マユちゃん、富士山みたいでしょう、って。①あ、そうか、そういうことか!!

「バーバ、わかった、少し待ってて。マユ、かき氷買ってきてあげるから！」

気がつくと、大声で叫んでいた。私が騒々しく部屋を出て行こうとした時、ママが目を覚ました。

「マユ、どこ行くの？」

眠そうな気だるい声で尋ねるので、

「バーバ、富士山が食べたいんだよ、絶対にそうだよ、だから今」

そう言いかけると、

「富士山？」

ママは、不思議そうに本物の富士山の方を見つめる。

「だから、何年か前、みんなでかき氷を食べに行ったじゃない。あれだよ、あそこのなら、バーバ、食べられるんだって」

「だって、あの店は」

「わかってる！　でも、行くしかないでしょっ！」

じれったくなり、**B** 乱暴な声を出してしまう。けれど、そうしている間にも、バーバの体に変化していくようで怖かったのだ。

私は、ホームに置いてあるクーラーボックスを肩に担ぎ、猛然と部屋を飛び出した。廊下を走りながら、バーバが受け付けなかったキャラメルを、口の中に放り込む。

駐輪場に停めてあった自転車にまたがり、かき氷店を目指した。大雑把に言うところ、そこは、かつて家族三人で暮らしていた町の角にある。道なら覚えていた。ただ、パパの車で通った時の記憶だから、交通量の多い幹線道路を走らなくてはいけなかった。

夏休みで連休のせい、車がかなり渋滞している。私は、臨機応変に歩道と車道を交互に走った。ぐんぐんと富士山が迫ってくる。急がなきゃ、急がなきゃ、気がつく、猛スピードで走っていた。体が、風の一部になってしまっていた。

何かアクシデントが起きても不思議じゃなかったけど、何も起きずにかき氷の店まで辿り着く。でも、やっぱりここの、ものすごい人だかりだ。店の前に、長い行列ができていた。どうしたら良いのだろう。このまま待っていたら、夜になってしまふかもしれない。私は、一心に店の奥へと突き進んだ。

この店では、天然氷というのを使っている。冬、プールのような所に水を貯めて自然の力で凍らせ、それを切り出して保管し、かき氷にするのだ。私は今でも普通の氷との違いがよくわからないけれど、パパはその氷の味をえらく褒めていた。この氷でウイスキーの水割りを作ったら、うまいだろうなあ、とか何とか言っている。でも、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。一秒でも早くバーバにかき氷を届けなければ……。

店の庭では、みんなうれしそうにかき氷を頬張っている。あの時も向日葵が満開だった。確かに数年前、私達はこのままだけでも同じメンバーでいることに、何の疑いももたず、ここでかき氷を口に含んだのだ。

「すみません」

勇気を振り絞り、窓の所で四角い氷を機械で削っているおじさんに声をかけた。でも、周りが騒がしくて聞こえなかったのか、無視されてしまう。

「すみません！」

二度目は、声を強くした。ようやくおじさんが、できたての氷の山に透明なシロップをかけながら私の方を見てくれる。けれど、その先の言葉が繋がらない。私はみるみる泣き止まなくなった。C、バーバにかき氷を食べさせたいだけなのに。どうしてこんなに悲しくなってしまうのだろう。けれど、早く言え、と何かが私の背中を強い力で前に押し付けてくれたのだ。

「バーバが、いえ祖母が、もうすぐ死にそうなんです。それで最後に、このかき氷を食べたいって」

ぐっとくちびるを噛みしめ、涙の落下を食い止める。②一瞬、音という音が世界から消えた。どうしてそんなことを口走ったのか、自分でもよくわからなかった。ママとの会話でも、ずっと気をつけて避けて通ってきた、一文字の単語。それが口をついて出たことに、自分でも驚いてしまう。

「ちょっと待ってて」

子供の言葉など相手にしてくれないかと懸念^{けねん}していたのに、おじさんはぶっきらぼうにそう言うのと、またくるくと機械のレバーを回し始めた。目の前のカップに、白い氷の山ができていく。私は、ポケットから小銭^{こぜに}を取り出した。かき氷一杯^{いっぱい}は買える。おじさんは、氷の小山の上から、透明なシロップをうやうやしくかけた。それを、クーラーボックスの中に入れてくれる。

「ありがとうございます！」

お金を払い、深々と頭を下げて、その場を立ち去った。

帰り道は、ますますスピードを上げて自転車走らせる。クーラーボックスの中の小さな富士山が溶け出す前に、どうしてもバーバに届けなくてはならない。

「ただいま。バーバ、富士山、持ってきたよ」

ホームに戻ると、またカーテンが閉じていて、部屋全体が（注）飴色^{あめいろ}に見える。クーラーボックスから、急いでかき氷を取り出した。

D 全部溶けてしまっていたらと想像すると胸が潰れそうだったけれど、かき氷は、少し縮んだように見えるだけで、きちんと富士山の形を留^{とど}めている。私は、ママにかき氷を手渡^{わた}した。

「はーなちゃん、あーん」

ママはそう言いながら、バーバの口元に木製のスプーンを差し出す。バーバのくちびるは、うっすらと開いている。けれど、スプーンが滑^{すべ}り込めるほどの隙間^{すきま}はない。

「マユが、一人で買いに行ってくれたんですよ」

ママの瞳^とから、つるんと一粒^{つぶ}の涙が落ちる。やがてバーバは、何かを言いかけるように上下のくちびるを広げると、スプーンを受け入れた。

「おいしいでしょう？」

ママの声が湿^{しめ}っている。二度、三度と、バーバはスプーンの上のかき氷を吸い込んだ。そのたびに、目を閉じてうっとりとした表情を浮かべる。

私は確信する。バーバは今、数年前の夏の日、家族で行ったかき氷店のあの庭に帰っている。ごくりと喉^{のど}が鳴って、富士山の一部が、バーバの体の奥に染^しみ込んでいく。私は窓辺に移動して、カーテンをかきわけ外を見た。富士山が、オレンジ色に光っている。すると、マユ、とママが呼ぶ。

振り向くと、ほら、バーバがマユにも食べさせたいって、と、私を手招いている。驚いたことに、バーバは自分で木のスプーンを持っている。

近づくと、私の口にかき氷を含ませてくれた。同じように、ママの口にもかき氷を含ませてくれる。③ ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。

「おいしいねえ」

舌の上のかき氷は、まるで冷たい綿のようだ。さーっと溶けて、消えてなくなる。体のすみずみにまで、爽やかな風が吹き抜ける。

「眠くなってきちゃった」

そのままバーバのそばにいたら、泣いてしまいそうだったのだ。簡易ソファへ移動した。ママの前で泣くなんて、かっこ悪い。

「軽い熱中症かもしれないから、そこで少し休みなさい」

ママが、威厳たっぷりに命令する。バーバとママ、二人の世界を邪魔しないよう、横になってそっとまぶたを閉じる。

(小川 糸『あつあつを召し上げれ』)

(注1) バーバ マユの祖母であるバーバは、家族のことがわからなくなり、数週間前からホームに入居しているが、食事をほとんど

ど受けつけなくなってしまうている。今日は、ママが早起きをし、家からお弁当を作って持ってきたのだが、バー

バは一口も食べてくれなかった。

(注2) 飴色 うすい黄色みをおびた茶色。

問一 空欄A～Dにあてはまる最も適当な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア ただ イ まだ ウ いざ エ もし オ つい

問二 傍線部①「あ、そうか、そういうことか!!」とありますが、ここでマユはどのように自身の考えを変化させましたか。次の空欄に合うようにそれぞれ答えなさい。

マユは、バーバが漏らした「ふ」という音を聞いて、バーバは
と伝えたいのだと考えていたが、

問三 傍線部②「一瞬、音という音が世界から消えた。」とありますが、どうしてマユはそう感じたのですか。

問四 傍線部③「ママは明らかに、私よりも年下の少女の顔に戻っていた。」とありますが、それはどうしてですか。

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|-------------|---|-------------|---|------------|
| 1 | 伝家のホウトウを抜く。 | 2 | センバイの特許をとる。 | 3 | カツキ的な発明。 |
| 4 | アンウンが立ちこめる。 | 5 | チヨジュツ家を志す。 | 6 | 試合のショウイン。 |
| 7 | フンマツの薬。 | 8 | 責任をオウ。 | 9 | 子どもが犬をカマウ。 |
| 10 | 肩のニが下りる。 | | | | |

受験番号

氏名

評 点

【一】

問
一

[illegible]

問二

問三

問四

□

問五

11

問六

10

【二】

問一

A
B
C
D

問二 マユは、バーバが漏らした「ふ」という音を聞いて、バーバは

1000

と伝えたいのだと考えていたが、

と伝えたいのだと考え直した。

問三

問四

【三】

6	1
7	2
8	3
9	4
10	5